

## 潮風のメロディ 1971年その2

南沙織の登場は衝撃だった。

南沙織の新しさは大別して二つある。

一つはシンガーとしての新しさで、もう一つは存在としての新しさである。

シンガー南沙織の最大の特徴は「ナチュラル」かつ「シンプル」という二点である。これは声質だけでなく、言葉の置き方やアクセント、タイミングといったリズムに関する部分に起因しているが、歌唱技術としてのスタッカートやビブラートの使用も多くみられない。

ノリ≒ビート感は「ジャスト」である。つまりメロディー=音符に対して前ノリでもなく後ノリ=タメもないので自然なビート感である。かつ音圧も強くない。このビートは南沙織の体内から生まれた固有のものである。

これらは筒美京平がデビューから作品を提供した歌手に共通している点ではあるが、実際に初期のレッスンやヴォーカル・レコーディングにどの程度関与していたかは、個々異なっているので、そこだけに起因しているわけではない。ただ楽曲自体にそのような方向性に導く色合いや個性があることは確かである。

「潮風のメロディ」におけるオーケストレーションでの大きな特徴は使用楽器で、グランド・ハーブ、ガット・ギター、フェンダー・ローズによる彩りが際だっている。この楽器編成は筒美京平にとってもかなり新しいサウンド・コンセプトで当時のラブ・サウンズ・ブームの予兆でもある。イントロのハーブは弘田三枝子「渚のうわさ」以来の筒美京平伝家の宝刀ともいべき起用で、筒美京平が南沙織に書き下ろした全17曲のシングル曲でハーブが使用されているのはこれだけである。

楽器編成はドラムス、エレキ・ベース、エレキ・ギター、ピアノの基本リズムに前述のハーブ、フェンダー・ローズにストリングスとグロッケンが加わり、シェーカーとカスタネットの細かいビートがリズムを引き締める。BPMは137とかなり速いが聴感上は軽快なアップ・テンポという印象である。

広がりのあるイントロの爽やかな旋律はガット・ギターとエレキ・ギターのユニゾンが主役で倍音のような響きが創出されている、冒頭の4小節のコード進行を細かくみるとCM7→Am7(onG)→Em→F→F(onC)→Am7(onG)→Em



(onD)→G7となる。

構成はイントロ8→A12→B7.5→C10.5が1楽章で2番でイントロを挟んでBCを繰り返す2ハーフ。Bは「♪ もうひとこと」でCは「♪ ひとりで 歩く」の箇所。歌部分の楽節が変則的なのは歌詞先行で制作されたと考えられるが、歌詞先行でこの流れるようなメロディーが生み出されること自体に驚かされる。

ガット・ギターや間奏で印象的なオブリガードを奏でるフェンダー・ローズやグロッケン「柔らかかでシャープなサウンド」が完成型に想定されているのだろう。リズム・セクションはベースが軽いシャッフルで、スネアとバス・ドラムが調和してビートを形成。

Bパート「♪ もうひとこと～」ではピアノが低音部(左手)を8符のビートをスタッカート気味に強調してエレキ・ベースも同じ動きで参加。Cパートではハネたタンバリンも登場する。Bパートの歌のメロディーとコード進行はAm→Em→Am→F6→E7とシンプルだが、演奏パートはAm7→AmM9→Edim→Em\_add9→Am7→E7→DmM7(onF)→E7とかなり凝ったサウンドをごく自然にこなしている。

バックিং・ヴォーカルはまさにシンガーズ・スリーここにあり、といった鮮やかなハーモニーを聴かせている。イントロの「♪ UH WAH～」だけでなく「♪ 歩く港～」「♪ くちづけした～」では歌詞でのハーモニーが南沙織の声質とのマッチングも抜群で心地よく響く。

南沙織の歌唱の最大の特徴は語尾をストレートに歌うところで、サビの「♪ もう一言 言われたら」を聴くとよくわかるが、「♪ もうひとこと」の「♪とー」や「♪たーらー」の音の伸ばし方がすべてストレートで、「♪と～」や「♪た～ら～」のような歌い回しをしていない。譜面上の音符の動きの指定は「タイ(同じ音階をひとつの音符のようにつなげる)」であってスラーやレガートではない。楽理的には「タイ」であることはもちろんだが、この自然なトーン・コントロールは南沙織の体内ビートから導かれたもので、テクニカルな指導によって形成される技術ではない。Aメロの「♪あなたの こと～」の部分に少しだけアクセントをつけているが、他の女性シンガーに比べると圧倒的に少ない。それ以前の歌謡曲はヴィブラートやテヌートといった響きや、ポルタメントやレガートまたはコブシを効果的に用いて情感を演出することがヒット曲作りの常道と信じられてい



たが、南沙織の歌唱はそういった癖や技法とは無縁である。60年代の歌手ではほぼ見当たらないが、あえていえば伊東ゆかりの歌唱が近いかもしれない。

音域は下が歌いだしのソで上が「♪言われたら〜」の「♪れ」のドでほぼ1オクターブ半。デビュー曲の「17才」とレンジは同じだが、キーは「17才」のB♭から半音上げてCにしている。これはグランド・ハーブをフィーチャーしたことが主な理由だと思われるが、B♭だとやや暗く聴こえることも関係しているのかもしれない。続く第3作「ともだち」もキーはCで歌いだしは「潮風メロディ」とほぼ同じコード進行を採用している。歌いだしの「♪しおかせに〜」の音階は「♪ソミレドソ#〜」で「♪に〜=ソ#〜」の半音箇所にあてたCaugのコードがフックになっている。

初期の南沙織の制作は日音とCBSソニーの両方で、日音はプロデューサー村上上司と現場ディレクターが小栗俊夫、CBSソニーはプロデューサーが酒井政利でアシスタント・ディレクターが金塚晴子といった配置でレコーディング・エンジニアは内沼映二がメイン。実際のレコーディングはザ・ワンダース出身の小栗俊夫が現場の制作進行を担当していた。

有馬三恵子と筒美京平の初作品は川辺妙子「女になるの」(70年5月)。続いてクマとアサ「男と女」(70年10月)があり、どちらもムード歌謡の範疇にある作品で、「17才」が三作目となる。「潮風メロディ」における有馬三恵子の情景描写と回想と今を織り混ぜる作風は小川知子「初恋のひと」の「♪そよ風みたいに偲ぶあの人は今もう私の事などみんな 忘れたかしら」とも通じる有馬三恵子の黄金律ともいうべき手法である。有馬三恵子オリジナルの季語「潮風、港、口笛、夕暮れ、舟」をキーワードにして見事な短編詩に纏めあげた叙情派詩人有馬三恵子の傑作である。

20世紀最大の世界的な音楽革命ともいうべき「8ビート」はベビー・ブーマーズの成長と歩みをともしてきた。日本における端緒は1958年2月の「日劇ウエスタン・カーニバル」である。

そこから登場したロカビリー三人男をライトにしてより一般化したのがボーイ・ネイティヴともいうべき坂本九と飯田久彦で、その女性版がカヴァー・ポップスの弘田三枝子とナベプロ三人娘(中尾ミエ、伊東ゆかり、園まり)である。続く青春歌謡では橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦の御三家が人気を博したが、女性歌手の青春歌謡のヒットは吉永小百合のみで、吉永小百合は青春歌謡の前提となる青春映画の大スターで歌謡曲は女優業の副産物である。その後を受けたのがグループ・サウンズとビート歌謡である。男性は沢田研二(ザ・タイガース)と萩原健一(ザ・テンパーズ)で女性は黛ジュン。

60年代のポップス系歌謡曲シーンを要約すればこのようになる。ウエスタン・カーニバルの背景にはジャズ喫茶と米軍キャンプとそこから誕生した芸能プロダクションの存在がある。渡辺プロダクションの勢いはもとより、舟木一夫はスウィング・ウエスタの堀威夫の興した堀プロダクション(現ホリプロ)所属で、西郷輝彦と黛ジュンはウエスタン・キャラバン出身である。唯一の例外は老舗レコード会社ビクター専属作家の吉田正門下の橋幸夫ということになる。

これらは、歌謡曲の一側面であるが、60年代のポップス・シーンのルーツを辿ると源流はかなり限られている。レコード会社専属作家の弟子がバンドをルーツに持つジャズ喫茶か。歌手としてのレコード・デビューの成功には広義の徒弟制度が存在していた。

黛ジュンに続く女性ポップスの筆頭はいしだあゆみである。二人は佐良直美やピンキーとキラーズ、藤圭子とともに67〜69年を代表する存在で、黛ジュンの「恋のハレルヤ」「天使の誘惑」(なかにし礼・鈴木邦彦)と、いしだあゆみ「太陽は



泣いている」「ブルーライト・ヨコハマ」(橋本淳・筒美京平)はGSブームと表裏一体である。フリー作家による作品で和製ポップスのレーベルからのリリースであり、同時にポスト和製ポップスを担っていた。

黛ジュン・フォロワー=ビート・カールズは多くいたが、いしだあゆみフォロワーは少ない。GS=ビート歌謡と相対的なジャンルとしてのムード歌謡はわかりやすいトレンドだが、いしだあゆみの本質的なオリジナリティーが、新しい形式でのティーズ・ポップであることの理解がまだ十分に理解されていなかったということでもある。形をかえて登場したのが、なかにし礼・鈴木邦彦の「恋の奴隷」で

鮮やかな変身を遂げた奥村チヨやムード歌謡を取り入れた園まり「夢は夜ひらく」、伊東ゆかり「小指の想い出」である。カヴァー・ポップス出身の弘田三枝子「人形の家」や森山加代子「白い蝶のサンバ」も新たな装いでリバイバルしていた。

CBS・ソニー(現在のソニー・ミュージックエンタテインメント)は電機メーカーであるソニーが1968年に米国のCBSと設立した合弁会社である。

戦前からのレコード会社5社=コロムビア、ビクター、キング、テイチク、ポリドールに東芝(59年設立)を加えた6社は同時期の映画会社5社と同様に娯楽産業の専門分野として他業種からの参入が少ない分野だった。コロムビアから分裂したクラウン(63年)とミノルフォン(66年)を加えても8社という状況で特に長きにわたるコロムビアの一強は揺るぎのないものだった。

米国CBSはNBC、ABCと並ぶ3大ネットワークの一社で、テレビ、ラジオを動かす放送事業者の大手で、傘下のCBSレコードも日本コロムビアと長年ライセンス契約を続けた米国のメジャー・レーベルである。60年代にはボブ・ディラン、サイモン&ガーファンクル、アル・クーパー、ブラッド・スウェット&ティアーズ、シカゴ、ジャニス・ジョプリンを擁してヒットを連発するが、CBS・ソニーの第1回新譜はサイモン&ガーファンクルの「サウンド・オブ・サイレンス」が大ヒットする時期で日本コロムビアから発売された直後にCBS・ソニーに発売権が移行して市場には両社のレコードが併存していた。

1970年には渡辺プロダクションが本格的にレコード・ビジネスに参入。米国のワーナー・ブラザーズと電機メーカーパイオニアと三者の出資によるレコード会社を設立した。ワーナー・パイオニア株式会社(現・ワーナーミュージック・ジャパン)である。また同年にはフジサンケイグループのニッポン放送がキャニオン・レコード(現・ポニー・キャニオン)を設立。このようにCBS・ソニーの誕生はレコード産業の勢力図を大きく塗り替える可能性を秘めていた。

国内制作=邦楽はフォーリーブスとアダムスが第1回新譜でヴィレッジ・シンガーズも「落葉とくちづけ」からCBS・ソニーに移籍。69年にはカルメン・マキの「時には母のない子のように」とピーター「夜と朝のあいだに」が大ヒット。翌70年には朝丘雪路「雨がやんだら」と、にしきのあきら「もう恋なのか」が続いた。カルメン・マキもピーターも前述したジャズ喫茶やウエスタン・カーニバルとは無縁のカウンター・カルチャーがバック・ボーンにあり、CBS・ソニーは専属作家とも無縁である。ここには新たなフォーマットによる新たなシーンと新たな世代とそこから生まれる次なるヒットの可能性が明確に示されていた。

「ソニーのシンシア」はこれらを背景に誕生した。私の著書『歌謡曲』(2011年岩波新書)で南沙織について「返還前の沖縄出身でアメリカン・スクールに通うフィリピン系ハーフ」と記述したが、これは明らかに誤りで正確には「生母の再婚相手がフィリピン人で両親ともに日本人」である。また「デビュー時は奄美大島生まれとされていた」という記述もあるが、より正確には「生まれも育ちも沖縄県」であることを追記するべきである。

『歌謡曲』における南沙織についての記述は下記になる。少し長いが引用する。

「一九七〇年に登場した岡崎友紀と吉沢京子はそれ以前の若手女優とは異なる新たなキャラクターを演じていた。岡崎友紀の『おくさまは18歳』も吉沢京子の『柔道一直線』も脚本のメインは佐々木守である。1969～70年にかけての佐々木守は『月火水木金金』や『お荷物小荷物』といった作品で日本のテレビドラマに新風を巻き起こしていた。岡崎友紀と吉沢京子のイメージ形成は佐々木守のドラマによるところが大きく、二人が70年代アイドルの始祖といわれるの

はこのような背景がある。『月火水木金金』の吉田日出子や『お荷物小荷物』の中山千夏は雑誌「anan」に登場するような自由闊達な同時代の女性の日常を描いたものだった。

発刊時の「anan」は能動的なライフ・スタイルを総合的に提示した画期的な雑誌だった。それは女性の新たな価値観を呼び起こすもので、女性同士が見

知らぬ土地を旅することや未知の文化に触れることを、実際の取材を通して文章と写真とイラストを組み合わせる記事として成立させていた。そこでは最新のファッションやフランスやアメリカの文化や映画や音楽と同じように、料理や恋愛が語られていた。

「anan」において新進ファッション・デザイナーのコシノヒロコやスタイリストの堀切ミロや川村都、イラストレーターの大橋歩はすでにスターだった。詩人の白石かずこや作詞家の安井かずみもよく知られていたが、モデルの立川ユリや秋川リサのような存在がテレビドラマの中山千夏や岡崎友紀だけでなく、音楽の世界にも求められていた。

南沙織は荒井由実とは同年の1954年の生れである。返還前の沖縄出身でアメリカン・スクールに通うフィリピン系ハーフだが、デビュー時は奄美大島生まれとされていた。翌72年デビューの荒井由実は「anan」の自由な女性像を音楽化した最初の女性シンガー・ソングライターであり、「anan」の若き女性像と岡崎友紀や吉沢京子の新しいアイドル性を歌謡曲で融合させたのが南沙織である。」

南沙織の初期のアルバムの帯には「ヤングのテーマ」の文字が多くみられる。70年代型の青春歌謡というコンセプトが根底にあるのは「17才」というタイトルからも理解できるが、大きくは「世代」を前面に打ち出している。カヴァー・ポップスも青春歌謡もターゲット、すなわち購買層は団塊世代である。1970年代を迎えて団塊世代の多くは就職または結婚していた。つまり社会人になっていた。現在からは想像しづらいが、「就職or結婚=社会人=レコードを買わなくなる」は当時のごく一般的な認識である。ジャズやクラシックとは違って歌謡曲のレコードを購入して聴くという娯楽は限られた年代、主に10代に向けてのもので、レコード会社にとって新たな世代つまり新たなマーケットの開発は必至だったのである。

南沙織のはじまりは「普通の女の子」が歌手デビューしたという印象がまさに衝撃的だった。これはまったく新しいコンセプトで衣装もメイクも髪型も立ち居振る舞いも、その佇まいもそれ以前の「プロの芸能人」とは無縁のところから登場した。これが南沙織の存在としての真の新しさである。そして、これを「演じていた」のではなくシンプルかつナチュラルに存在したのが南沙織というシンガーの最も特筆すべき新しさである。

南沙織は「17才」と「潮風の名メロディ」のヒットで同年の『紅白歌合戦』に出演。レコード大賞新人賞を獲得した。71年のレコード大賞新人賞を獲得したのは小柳ルミ子「わたしの城下町」、南沙織「17才」、本郷直樹「燃える恋人」、欧陽菲菲「雨の御堂筋」、シモンズ「恋人もいないのに」の5組で最優秀新人賞は年間チャート1位の小柳ルミ子だった。

コロムビア、ビクターの二強の名前は無く演歌も見当たらない、作詞作曲はすべてフリー作家である。明らかに地殻変動が起きていた。1971年。歌謡曲は新たなシーンを迎えていた。 2021年5月9日





## 筒美京平\_南沙織作品リスト

	年月日	曲名	品番	作詞	編曲	アルバム	CHART	メーカー
1	1971/ 6/ 1	17才	SONA-86183	有馬三恵子	筒美京平		2	CBSソニー
2		島の伝説		有馬三恵子	筒美京平			
3	1971/10/ 1	潮風のメロディ	SONA-86202	有馬三恵子	筒美京平		7	
4		なぜかしら		有馬三恵子	筒美京平			
5		ふるさとの雨		有馬三恵子	筒美京平	17才		
6		シンシアの青春		有馬三恵子	筒美京平			
7	1972/ 2/ 1	ともだち	SONA-86215	有馬三恵子	筒美京平		7	
8		いつか逢うひと		有馬三恵子	筒美京平			
9	1972/ 5/21	純潔	SOLA-28	有馬三恵子	筒美京平		3	
10		素晴らしいひと		有馬三恵子	筒美京平			
11	1972/ 6/21	九月になれば	SOLJ-25	有馬三恵子	筒美京平	ヤングのテーマ		
12		女の子の気持		有馬三恵子	筒美京平	純潔/友達		
13		恋のフィーリング		有馬三恵子	筒美京平			
14	1972/ 9/21	哀愁のページ	SOLY-7	有馬三恵子	筒美京平		3	
15		美しい娘たち		土橋正之/ 有馬三恵子	筒美京平			
16	1972/12/21	ひとりごと	SOLL-26	有馬三恵子	矢野誠	早春のハーモニ		
17		ふるさとのように		有馬三恵子	筒美京平	—		
18		冬物語		有馬三恵子	筒美京平			
19	1973/ 1/21	早春の港	SOLA-74	有馬三恵子	筒美京平		11	
20		魚たちはどこへ		有馬三恵子	筒美京平			
21	1973/ 5/ 1	傷つく世代	SOLB-26	有馬三恵子	筒美京平		3	
22		昨日の街から		有馬三恵子	筒美京平			
23	1973/ 5/21	遠い海	SOLJ-63	有馬三恵子	筒美京平			
24		純情		有馬三恵子	筒美京平	傷つく世代		
25		忘れんぼさん		有馬三恵子	筒美京平			
26		あこがれの旅		有馬三恵子	筒美京平			
27	1973/ 8/21	色づく街	SOLB-63	有馬三恵子	筒美京平		4	
28		秋の午後		有馬三恵子	筒美京平			
29	1973/ 9/21	20才まえ	SOLJ-82	有馬三恵子	穂口雄右			
30		港のように		有馬三恵子	筒美京平			
31		私の出発		有馬三恵子	高田弘	ヤングのテーマ		
32		素顔の朝		有馬三恵子	筒美京平	~20才前		
33		美しい誤解		有馬三恵子	穂口雄右			
34	1973/12/ 5	妹よ	SOLB-90	有馬三恵子	高田弘			
35		ひとかけらの純情		有馬三恵子	筒美京平		8	
36	透き通る夕暮れ	有馬三恵子	筒美京平					
37	1974/ 2/21	いとしい傷	SOLL-62	有馬三恵子	筒美京平	ヤングのテーマ		
38		音楽会場にて		有馬三恵子	筒美京平	ひとかけらの純		
39		殉愛		有馬三恵子	筒美京平	情		
40		涙のひとつつつ		有馬三恵子	筒美京平			

筒美京平\_南沙織作品リスト

年月日	曲名	品番	作詞	編曲	アルバム	CHART	メーカー
41	1974/ 3/21	バラのかげり	有馬三恵子	筒美京平		15	
42		この街にひとり	有馬三恵子	萩田光雄			
43	1974/ 6/21	夏の感情	有馬三恵子	筒美京平		16	
44		愛の序曲	有馬三恵子	筒美京平			
45	1974/10/ 1	夜霧の街	有馬三恵子	筒美京平		17	
46		青春の終る日	有馬三恵子	筒美京平			
47	1974/12/21	女性	有馬三恵子	高田弘		23	
48		人のあいだ	有馬三恵子	筒美京平			
49	1975/ 4/21	思い出通り	有馬三恵子	萩田光雄		19	
50		ご無沙汰	有馬三恵子	筒美京平			
51		20の立場	安井かずみ	筒美京平			
52		DRUGSTOREのひと	安井かずみ	筒美京平			
53	1975/ 6/21	GET DOWN BABY	安井かずみ	筒美京平	Cynthia Street		
54		夏の終り	安井かずみ	筒美京平			
55		若い旅人	安井かずみ	筒美京平			
56	1975/11/21	ひとねむり	落合恵子	林哲司		27	
57	1975/12/ 5	ひさしぶりね	落合恵子	林哲司	人恋しくて		
58		思い出のかげり	落合恵子	林哲司			
59	1976/ 9/21	思い出岬	有馬三恵子	萩田光雄	哀しい妖精		
60	1977/ 3/ 1	ゆれる午後	有馬三恵子	萩田光雄		54	CBSソニー
61		春の愁い	有馬三恵子	水谷公生			
62		あとずさりする月日	有馬三恵子	筒美京平			
63		あの手この手	有馬三恵子	筒美京平			
64		いつか逢えますね	有馬三恵子	船山基紀			
65	1977/ 4/ 1	ふたり淋しがりや	有馬三恵子	水谷公生	午後のシンシア		
66		もう一人	有馬三恵子	筒美京平			
67		アリスの世界	有馬三恵子	水谷公生			
68		別れのマチネー	有馬三恵子	水谷公生			
69		目の中の春	有馬三恵子	船山基紀			
70	1978/ 8/21	Ms.	有馬三恵子	筒美京平		80	
71		さよならにかえて	有馬三恵子	大村雅朗			
72		しなやかなケ・ダ・モ・ノ	有馬三恵子	萩田光雄			
73	1978/12/ 5	シンプル・シティー	有馬三恵子	萩田光雄	Simplicity		
74		ハロー・シャンペン	有馬三恵子	萩田光雄			
75		私の港	有馬三恵子	萩田光雄			
76	1992/ 2/21	ファンレター—SO GOOD NICE—(シンシア名義)	阿久悠	萩田光雄	青空		
77	1992/ 6/21	FINESSE(シンシア名義 デュエット南佳孝)	阿久悠	筒美京平/工藤隆	MATURITY		
78		DEEP RIVER(シンシア名義)	有馬三恵子	萩田光雄	MATURITY		